

マルティン・ゲルベルト著
『シュヴァルツヴァルトの歴史 (Historia Nigrae Silvae)』
に示された自然と人間への三つの視点

藤 本 武

新潟青陵大学福祉心理学科

(英) 3 Angles to the Nature and Human Being
in the Book "Historia Nigrae Silvae"
by Martin Gerbert

(独) 3 Gesichtsdimensionen zum Natur-Sein und zum
Menschen-Sein in dem Buch
"Historia Nigrae Silvae"
von Fürstabt Martin II Gerbert.

Takeshi Fujimoto

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY
DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

Abstract

Das Buch "Historia Nigrae Silvae" von Martin Gerbert mit dem wertvollen Buch(um 1527) von Erasmus von Rotterdam, das viele handschriftliche Notizen des Erasmus enthält, ist in Oberried Klosterbibliothek gefunden worden. In meinem Beitrag wird die Philosophie von Martin Gerbert zum Natur-Sein und Menschen-Sein in Schwarzwald durch das Buch "Historia Nigrae Silvae" recherchiert erwähnt. Dass Gerbert behauptete, die Geschichte des Schwarzwaldes die Geschichte des St. Benediktiner Klosters gewesen ist, bedeutet, dass Natur-Sein und Menschen-Sein in Schwarzwald von Benediktiner Kloster kultiviert worden sein sollen. Die 3 Gesichtsdimensionen Gerberts zum Natur-Sein und Menschen-Sein sind, Leiden, Verlorenes, und Einoede. Darüber wird hier erwähnt. Dann über die aus dem Begriff "Einoede" Gerberts als Welt und Erde in Schwarzwald Geschaffene.

Key words

Schwarzwald, Philosophy Martin Gerbert, Concept Borderland

要 旨

ロッテルダムのエラスムス自筆の欄外注を持つエラスムスの古書(1527年頃)と共に、マルティン・ゲルベルト著『シュヴァルツヴァルトの歴史 (Historia Nigrae Silvae)』が最近シュヴァルツヴァルトのオーバリー修道院図書館で発見された。この論文ではゲルベルトの著作に示されたゲルベルトの自然存在と人間存在への思想をとりあげる。ゲルベルトは綿密で謎解きをする探偵のように、膨大な古文書、考古学的出土品、歴史的資料、諸参考文献を論拠に、シュヴァルツヴァルトの歴史を再構成し、その歴史はベネディクト派修道院の歴史であると、結論する。彼の歴史解釈の三つの視点、痛み、失われたもの、辺境への視点について論述し、最後に世界と大地の根源的抗争としての辺境概念が創造するものについて論及する。

キーワード

シュヴァルツヴァルト、痛みへの視点、失われたものへの視点、と辺境への視点の3視点、世界と大地の根源的抗争としての辺境概念

はじめに

この論文では、最近オーバリート修道院図書館で発見されたゲルベルト著『ヒストリア ニグラエ シルヴァエ』に示された歴史観とその思想を解明することにより、シュヴァルツヴァルトの自然景観と人間との関わりの過程を探ろうとするものである。景観としての自然は人間による自然への文明化という過程を経て形成されていくのが常である。環境としての自然へ働きかける人間の様々な意図が働いて自然の文明化の方向が決定することになる。ゲルベルトはその著作においてシュヴァルツヴァルトの歴史をローマ帝国時代から書き始め、彼の活躍した18世紀に至るまでに、シュヴァルツヴァルトへ入植した三つのグループについて述べている。一つのグループはケルト人とゲルマン人である、第二のグループはローマ帝国であり、第三のグループが修道院である。位置的にもシュヴァルツヴァルトはローマ帝国と自由ゲルマニアに挟まれた地域にあり、古代ローマは、自らの森（シルヴィア）に働きかけ、フォロロマノを築いたように、帝国化したローマは、ローマの平和（Pax Romana）という錦の御旗を立て、世界制覇を意図して、帝国に隣接する地域に入植し、そこを植民地とし、要所を都市化して、ローマ的景観を創造した。だが、ゲルベルトはこの著書の副題を「聖ベネディクト派修道院のコロニー」として、第三のグループの入植を主に論じている。その理由をゲルベルトは序言の中で、「聖ベネディクト派修道士たちがシュヴァルツヴァルトを都市化し、自然を文明化した。シュヴァルツヴァルトの歴史を聖ベネディクト派諸修道院のコロニー化の歴史と呼ぶのに、読者は異存ないであろう」と述べて、シュヴァルツヴァルトへの入植で最も重要であったのはこのグループであったとしている。それでは聖ベネディクト派修道士たちの自然の都市化、文明化はローマ帝国の意図と同一ではなかったのか。ゲルベルトの述べる聖ベネディクト派修道士たちの意図は、ローマ帝国の文化を継承していることにより、一見聖ベネディクト派修道会によるローマ帝國的植民地化を目指しているようであ

るが、ローマ帝国のそれとは異なり、特に諸修道院の創設者たちはローマ法王から派遣されてはいても、殆どはケルト系のアイルランド、スコットランド出身の修道士たちで、彼らの自然への愛着は深いものがあり、その愛着とは痛みの中に苦悩する人間と自然への共感であり、痛めるものへの関心（Sorge）であった、という認識がこの副題に示されている。アイルランド・スコットランドのケルト人は元来中部ヨーロッパに点在した部族であり、ローマ帝国によって辺境の地へ駆逐されたものであり、その意味では第一のグループに属する入植者である。従って修道士たちのシュヴァルツヴァルトへの働きかけも自ずからローマ帝国のそれとは異なっていることになる。この論文は人間と自然との関わりについて、ローマを中心にするればローマ帝国時代のシュヴァルツヴァルトを、ゲルマニアを中心にするればケルトからゲルマニアに至る時代のシュヴァルツヴァルトを、ゲルベルトの『ヒストリア ニグラエ シルヴァエ』を基礎にして論じるものである。最初にオーバリート修道院図書館でこの著作と共に、発見された最も価値ある古書について述べ、次に『ヒストリア ニグラエ シルヴァエ』著者ゲルベルトとこの著作の思想を取り上げ、それを基に古代と中世のシュヴァルツヴァルトの歴史の概要を試みる。

1 エラスムスの自筆欄外注付き古書（1527年）とゲルベルトの『ヒストリア ニグラエ シルヴァエ』（1783/86年）の発見について

ドイツ南西部に横たわる山岳森林地帯シュヴァルツヴァルトの中心都市フライブルクより南東へ12 km地点に、保養地である小村オーバリート(Oberried)がある。牧草地と果樹園がドライザムタール(Dreizamtal)に広がる溪谷景観を背景に、この村の中央に、朽ち果てた低い囲壁を持つ昔日のベネディクト派修道院が建っている。このオーバリートにある修道院は、1252年ザンクト・ウイルヘルム (St. Wilhelm) にウイルヘルム修道院として創立されたが、現在のオーバリートに1684年から87年にかけて建造され、1724年にベネディクト

派修道院ザンクト・ブラジエン (St. Blasien) に所属する修道院分院となり、1806年教会財産国有化によって修道院が廃止された。その結果オーバリート修道院図書館諸書籍は1980年代初頭修道院の雨漏り改修工事の際、偶然、屋根裏や部屋壁などから発見されるまで、200年間隠されたままであった。約350冊の古書が発見された。その後徐々に行われた古書修復分類の結果、ニュールンベルクのアントン・コーベルガー (Anton Koberger) 出版による1482年版聖書、フライブルクのキリアン・フィッシャー (Kilian Fischer) 出版による1496年版古書、銅版彫刻で装丁したマタエウス・メリアン (Matthaeus Merian) の歴史書『テアトゥルム・オイロパエウム (Theatrum Europaeum)』4巻、など神学、聖書学、歴史、文学に関する書籍が多く、殆どの古書はラテン語で書かれていたことが判明した。

オーバリート古書群にはザンクト・ブラジエン修道院長マルティン・二世・ゲルベルト (Marthin II Gerbert 1720-1793年) の失われた諸著作の大部分である38冊が含まれていた。発見された彼の諸著作の中でシュヴァルツヴァルトの自然と人間の関わりに関して最も重要なものは『ヒストリア シルヴァエニグラエ (Historia silvae nigrae)』三巻本である。この古書は書名が周知にも関わらず、ラテン語で書かれ、長い間、行く方知れずであったこともあり、今日まで殆ど内容と思はれは未公開であった。原著『ヒストリア シルヴァエニグラエ』三巻本は、古典ラテン語と中世ラテン語を主とし、それに引用資料のギリシャ語と近代になって散見されるドイツ語によって書かれている。昨夏8月最期の一週間私はオーバリートに一軒しかない旅館 "Zum Hirsch" に滞在して、オーバリート教会のポルトガル出身神父ジョゼフ・カプレルの好意により、修道院図書館で発見された貴重なこれらの諸古書を自由に手にとり、読ませてもらった。発見後原書のドイツ語版『シュヴァルツヴァルトの歴史 (Geschichte des Schwarzwaldes)』第一巻 (1993年) 第二巻 (1996年) が出版されたので、ドイツ語版訳者に合わせてもらうよう神父に依頼した所、訳者はすぐ近くに住んでいたが、ほんの一週

間前に亡くなられ、葬儀を終えたばかりだった。原著第三巻の『参考文献集』(1788)は未訳のままである。

最近 (2002年) になって、ロッテルダムのエラスムス (Erasmus von Rotterdam 1469-1536年) の古書がその中にあることが判明した。この古書の重要性は、表題は『エラスムス』(1527年) であるが、エラスムス自身によるラテン語による欄外注が随所にあることである。細い小さな字で実に几帳面に加筆がなされている。エラスムスは宗教改革の騒乱を逃れてバーゼルからフライブルクに亡命し、1529年から6年間フライブルクに滞在した。その間に加筆された古書であることは間違いない。1535年エラスムスはバーゼルに帰還した。この古書の意義は欄外注の解明を待ってさらに増大するであろう。エラスムス研究者には必見の書であり、世界に唯一である貴重な古書である。

2 『ヒストリア シルヴァエニグラエ』の著者ゲーベルトについて

福祉社会の建設

ネッカー河畔の町ホルプにある教区教会の教会記録台帳への登記によれば「1720年8月12日貴族商人である父アントニウス・ゲルベルトとヴィリンゲン (Villingen) 出身の母アンナ・マリア・リーガーの息子フランチスクス・ドミニクス・ベルンハルドの命名式が行われた」とある。この息子が後にボンドルフ (Bonndorf) の辺境伯となりまたザンクト・ブラジエン修道院長並びに修道会長となったマルティン2世・ゲルベルトであった^(註1)。彼の小児時代と青少年時代について殆ど何も残されていない。というのは彼自身が自己の伝記に全く僅少の記述を加えたに過ぎないからである。ただ一つの出来事が彼の人生に余りにも深く影響を与えていた。それは1725年1月ホルプの町が猛威を振るう大火に見舞われ多くの犠牲者を出した出来事であった。一夜のうちに250の家屋———その中にはハイリッヒクロイツ教会も含まれた———が灰塵に帰した。この大火が彼の心に与えた打撃は大きく、彼は以下のようにそれを描写している。「私

自身は当時まだ5歳の幼児であった。火災により重い痛みを陥った。そこで私は乳母車に乗せられ、町の外へと避難させられた。そこから私は夜の間ずっと遠くの火炎を恐怖に震えながら見つめ続けた。火炎は今日もなお私の心を痛める」と。この大火は彼に痛みを持つ人々のために人生を捧げる結果をもたらした。彼はホルブ市立小学校を修了後、エヒンゲン (Ehingen) にある下級予備学校へ、さらに故郷の町にあるイエズス会派ラテン語学校へ、そしてスイスのアールガウ州 (Kanton Aargau) にあるクリングナウ (Klingnau) へと勉学の間を求め、最終的にはザンクト・ブラジェン・ギムナジウムへと転校した。16歳の時、修練士として修道院に入り、1737年9月28日永遠の誓願を宣誓し、1744年5月30日司祭へと叙任された。彼の得意な専門分野は神学と歴史、それに加えて教会音楽とその歴史である。ザンクト・ブラジェン修道会付属神学校で最初哲学の教授、後に神学の教授の傍ら彼は修道院記録文書係の職を委託された。この時期 (1757-1759年) に、それぞれ独自のテーマに沿った諸教理を持つ8巻からなる神学書 (Pricipia theologiae) という壮大な著作を現した。これはスコラ哲学の系譜に立ってトマス・アクイナスの神学を展開したものである。1759年フランスへの研修旅行と1760年のアレマン、バイエルン、オーストリアそしてイタリア (とりわけローマ、ボローニアとカスィノ修道院) への長大な研修旅行で収集した古文書や資料は彼の諸著作の資料となった。その文献的成果は1765年の作品 "Iter Alemannicum accedit Italicum et Gallicum" (註3) として発表された。

1764年ゲルベルトは、学問の中心地であろうとするザンク・ブラジェン修道院長に選定され、マルティンⅡ世と呼ばれた。彼は大修道院長職と共に1759年既に帝国直属伯爵領ボンドルフをも継承していた。辺境伯と大修道院長という二重の課題をゲルベルトは驚嘆すべき手法で解決していった。修道院への重い貢租と修道院や権力の側の貧しき人々への無配慮に苦しめられていた貧しい領民に対して、彼は緊急に必要な一連の改革を実行した。

例えば、1767年新ヴァルトオールドヌンク (森林法) と新フォールストオールドヌンク (森林管理法) を、1767年に家畜不足と家屋分配に関する条令を、1771年教師として満期退職の伍長を廃止し、訓練を受けた教育者を採用する新学校法令を、1780年火災保険法をなど次々に改革をおこなった。1765年彼は既にボンドルフ貯蓄銀行を設立した。(これはドイツで二番目に古い銀行)。この銀行はどの男性にもどの女性にも同じ利息を支払い、好条件で資金を貸した。この銀行は、今日は原則的に当然であるが、誰にたいしても、同じ利息をはらった。このボンドルフ貯蓄銀行は今日も存在している。1766年都市ロートの身分の高い人々が所有していた料亭兼旅館ロート館「ツーム ローテン ハウス」を買い取った。彼は様々な困難を乗り越えてそれを1792年ビール醸造所にした。——今日世界に名高い「バーディシェ シュターツブラオ エライ ロートハウス」である。ゲルベルトはこうすることによって、職場のないことに痛みを覚えている技術労働者に職場を提供しただけでなく、とりわけ領内の男性を粗悪なシュナップスの常習的飲酒による弊害から護り、健康的で安価な飲み物の摂取をもたらす目的をもっていた。彼がそのことについてどれ程の成果をあげたかは今日計り知れないものがある。1783年ボンドルフの貧しい人と病いの人のためにシュピタル (救貧院) と労働のできない人のための矯正施設を設立し、その後もこれらの施設整備に多額の援助をしつづけた。それに加えて、ゲルベルトは多くの社会福祉施設と住民の福祉に直接目を向けた諸条令を制定し、痛みとの和らぎへ眼差し向ける福祉社会を先取りした思想の持ち主であることを証明した。

修道院長の業績

修道院長としてのゲルベルトは、ブライスガウ (バーデン南部地方) のラントシュテュエンデ (領邦議会への出席資格をもつ身分=領邦等族) 会員であり、その領邦議会常任議長であるだけでなくオーストリア・ハプスブルク家の家臣であり、オーストリアの飛び地である前オーストリア宮廷の臣下でもあった。そ

のことによって彼は上部からの政治的諸要請とザンクト・ブラジェン修道院との利害対立の狭間に常に立たざるをえなかった。そこでゲルベルトは領邦君主としての活動と共に、彼の広範囲にわたる学問的諸著作に基づいた知識人、学者、伯爵、皇帝家系、法王との交流によって得られた国際的評価を利用して、修道院の存続に尽力した。^(註4)

1768年ザンクト・ブラジェン大修道院が大火に見舞われ、修道院の大部分、図書館、文書記録保管所、教会など殆どが灰塵に帰した。大火直後居場所を失った修道士たちは各地の修道院へと四散した。残ったほんの少数の修道士たちと協力してゲルベルトは修道院の再興に全精力を傾注した。彼の尽力によって、灰塵の中から再興されたザンクト・ブラジェン大修道院はこの地方の精神的中核と学問研究の中心地の位置を不動のものにしたのであった。更に、既にハプスブルク家傘下の13家系全体とスイスとバーゼルの前オーストリア宮廷とにあった旧墓所を1770年ザンクト・ブラジェン新墓所へと祝祭行列をもって移転させた。このザンクト・ブラジェン修道院がハプスブルク家の菩提寺になることはゲルベルトの長年の夢であった。(このことをゲルベルトは自己の著作に記している)。この新墓所がハプスブルク家の墓所とされることによって、ゲルベルトはオーストリア皇帝家とザンクト・ブラジェン大修道院との間に不動の内的連関が生じることを願っていた。それは、修道院を再興するに際し、自己の領地ボンドルフに教会付き新修道院を建設するという考えを放棄して、ザンクト・ブラジェン修道院の跡地に、彼が命名した「テンペルス＝聖殿」の建築をフランス人建築家ミヒャエル・ド・ルクサンナール他に委託したことの理由でもある。計画から完成に至るまでに15年の歳月が経過し、1783年擬古典様式の華麗な銅葺きドームが献堂された。ザンクト・ブラジェン修道院の存続に最も寄与した一人であるゲルベルトは1793年5月13日亡くなった。この壮大な教会は今日も尚ザンクト・ブラジェンを訪れる人々を魅了し、人々に霊的高揚を与えている。

3 『ヒストリア ニグラエ シルヴァエ (以降『ヒストリア』と省略) に示された思想

彼の著作は約70冊あるといわれ、総ページ数は2万を超えていた。彼の著作の中心主題は、神学の分野、例 前述の「Principia theologiae」^(註4)、音楽の分野、例「de cantu et musica sacra」^(註5)、「scriptores ecclesiastici de musica sacra potissimum」^(註6)、と歴史の分野、例「Codex epistolaris Rudolphi I」^(註7)、「Monumenta veteris liturgiae Alemannicae」^(註8)と実に多岐にわたる。この論文で扱う著名な歴史書『ヒストリア』が刊行されたのは1780年代であった。第一巻は1783年512頁、第二巻は1788年555頁合わせて1067頁に及ぶ二巻本の名著でゲルベルト自身の監修の元に修道院付属印刷所で出版された。この著作には紀元後5世紀までの前史時代から初めて18世紀に至るシュヴァルツヴァルトの歴史が記述されている。その際、未公開の多数の古記録と古文書が使用されていて、それを纏めて第3巻「Codex diplomaticus」として編纂し出版した。この論文では以下に列挙するゲルベルトのラテン語版原書をアダルベルト・ヴェーによるドイツ語訳版を参考にして論じる。

ゲルベルトの原著

Martin Gerbert, *Historia nigrae Silvae. ordinis S. Benedicti coloniae*, Typis San-Blasianis, Tomus I, 1783, (512 Seiten)
Tomus II, 1788, (555 Seiten)

Martin Gerbert, *Historia nigrae Silvae. ordinis S. Benedicti coloniae*, — Codex Diplomaticus, Typis San-Blasianis, Tomus III 1788 (450 Seiten)

発見後出版されたドイツ語訳版

Martin Gerbert. *Geschichte des Schwarzwaldes — Siedlungsgebiet des Heiligen Benedikt* —, übersetzt von Adalbert Weh, Rombach, Freiburg, Bd. I, 1993.. 810 Seiten Bd. II 1996 793 Seitenn. Litertur S.795-797. Register S.799-841.

彼の使用言語は当然書き言葉のラテン語で

あり、古典ラテン語の文法規則に忠実に従っているが、文体様式と文章形態は古典ラテン語的ではない。一つ一つの文章は平均的には22の単語から成立していても、部分的には極めて長文のもがあり、それに加えて一つの文章は、それ自体で完結していない。(例えば、第一巻のカエサル項を参照) 一つの文章は、主文節をもち、それは他の多くの副文節を従えていて、その結果文章全体を見通すのは容易ではなく、複雑な鎖状構造を形成している。文体の様式美とレトリック手法を彼は完全に放棄していて、言語表現はザッハリッヒであり、無駄がなく、構成的であることにより、生き生きとした語りではなく、研究室で練り上げられたものである。古典文法と同様に古典ラテン語の語彙を使用し、それに加えて、中世ラテン語の新造語と古典ラテン語の意味が中世に転化した語彙を多数取り入れ、それに、常にギリシャ語を「添え」ている。従って、翻訳は非常に骨の折れるものであった。意図された事柄を理解するためには文脈に依存するしかなく、特にゲルベルトが客観的資料に基づいて歴史的事実の記述からその歴史解釈をおこなう場合が非常に難解であった、とドイツ語版の訳者アダルベルト・ヴェー(Adalbert Weh 1940~2002)はドイツ語版の第Ⅱ巻の最初に添えられた「翻訳について」^(註9)の中で述べている。

ゲルベルトが『ヒストリア』に引用した諸資料を編纂した第三巻『文献資料集(Codex Diplomaticus)』(450頁)を検討すると、822年から1630年に至る年代順に並べられた344の原資料が収録されている。1759年と60年にフランス、アレマン、バイエルン、オーストリアそしてイタリアに研修旅行した際、各修道院において収集したもの、更に、彼が各方面から長い間収集してきた古文書類であった。修道院、教会、施設等の設立に関する古文書、修道院、教会、皇帝、諸侯への寄贈に関する古文書、辞令を含む諸公文書、皇帝、諸侯、修道院の諸特権書、購入、交換、贈与、などの契約書、諸許可書などで、大部分はラテン語だが、部分的にはドイツ語による古文書もある。これらの大半は今日も公開されてい

ない。従ってこれらの資料は歴史家にとって重要な宝庫である。更に彼は、随所で、文脈に応じて多数の歴史家の諸著作の記述を引用し、それらの著作の記述を比較検討し、歴史的事実に迫る努力を試みている。引用された著作を全てリストアップすれば膨大なものとなる。同時代のグリム兄弟は神話、伝説、民話を収集して、民衆の側に立ったドイツの歴史を再構築したが、ゲルベルトは聖者伝説さえ使用しないで、歴史批判によって資料として学問的に妥当性を有すると判断した資料のみを用いて、歴史を再構築した。当時として優れた近代歴史学の手法の持ち主であったことを示しているが、シュヴァルツヴァルトの民衆の心情を期待したものには物足りないものがあるだろう。例えば古代ゲルマン人の宗教を迷信と一言で表現しているところなどがそうである。どのような迷信であったかが記述されていない。それでも、彼が詳細に引用したり、記述したりしている箇所から、その迷信がダイアナ信仰であったり、樹木信仰であったりすることが、読み取れる点で、彼の『ヒストリア』はシュヴァルツヴァルトの人と自然の関わりに関する優れた資料でもある。従って、ゲルベルトの歴史解釈の視点が重要となってくる。その歴史解釈の視点は彼の生き様にかかわってくるものであるがゆえに、先に彼の「人となり」で述べた、5歳の際に大火から受けた心の重い痛みが、彼の人生を左右していることから、彼の視点はシュヴァルツヴァルトの「痛み」を持つ人々と自然への共感である、と考えられる。彼のスコラ哲学とトミズムの神学が目指す視点はシュヴァルツヴァルトの「痛み」への視点であった、と考えられる。前述したケルト、ゲルマンの宗教を迷信とする解釈にしても、それは、スコラ哲学に基づくトマス・アクイナス神学による判断であり、スコラ神学の教義に従えば、現実には土着の宗教であっても、信仰の対象がキリストでない故に迷信であり、その信仰によって人々が生かされ、啓示を受け、救いを得ていても、それは、迷える者、痛みの中に留まるものであり、その人々に手を差し伸べてきたのが、聖ベネディクト派の修道士たちの歴史であるとする視点である。この

「痛み」への視点がゲルベルトの第一の視点である。彼が領主として制定したヴァルトオルドヌンクもフォールストオルドヌンクの趣旨も「痛んで」しまった森林の再生と継続を目指すものであった。

著作は13章に別れていて、それぞれの章に各世紀があてがわれている。どの章も、最初西欧全般の教会史と世俗史、特に政治史とが総括的に記述され、次にシュヴァルトヴァルト地方とそれに隣接する地方の重要な聖俗諸侯及び貴族について、更にシュヴァルトヴァルトに対して権限をもつ各大司教区（マインツ、シュトラースブルク、ウオルムス、コンスタンツ）について述べ、章の中心においてシュヴァルトヴァルトの個々的な都市・町・個所と、とりわけ各修道院について報告している。最期にシュヴァルトヴァルト地方に影響を与えた歴史的出来事が付け加えられている。問題は一体ゲルベルトは隣接するシュワーベン、バイエルン、スイス北部およびエルザスの地方についても部分的には取り上げているものの、主にシュヴァルトヴァルト地方にのみ限定した部厚い著作をどのような動機で著述したかである。この問題の解明は彼の歴史解釈の視点を考える際に重要である。その動機は、副題「聖ベネディクト派修道会の入植地域」にあるように、自己の故郷と自らが属する修道会の歴史への個人的関心であることは確実である。けれども彼は第一巻の序言の中で、別の理由をも挙げている。彼は「祖国の歴史への寄与として、とりわけドイツ教会史への貢献として、（これらの歴史記述への試みは疑いも無く長い間痛みをもってなされてきた作業であるが）、私はシュヴァルトヴァルトの歴史を記述することを、企てた^(註10)」と述べている。その際、同僚であるフランス聖ベネディクト派サン＝モール修道会士マウリーナの著作『ガリア教会史Gallia christiana^(註11)』を模範にしたとしている。

そもそもドイツ教会史という概念は既に16世紀中葉にはじまっていた。カスパー・ブルシウス（Casoar Brushius^(註12)）がその人であった。その後、『イタリア教会史』が刊行された三十年戦争直後にシュワーベンのガブリエル・

ブセリヌス（Gabriel Bucellinus^(註13)）が『ドイツ教会史（Germania sarura）』に挑戦した。1720年ウイーンのハンズッツ（Hansitz^(註14)）、別名ハンズィツィウス（Hansizius）、が包括的なドイツ教会史を出版する計画を立てていた。けれどもハンズッツの試みは端緒において個人の力では手に余るものであることが判明し、二人の協力者をえて、多数の資料が集められたにもかかわらず、ブルシウスやブセリウスと同様、その著作は完成しなかった。ハンズッツの後ゲッティンゲン大学のヨハン・クリストフ・ガタレル（Johann Christoph Gatterer）とオーストリアのゲットヴァイク（Geweig）も試みたが完了できなかった。ほぼ2世紀にわたって、全ドイツ教会史への試みがつづけられてきたのである。

1769年ウオルムスのヴェルトヴァイン（Wuerdwein）は自身が長い間携わってきたドイツ教会史著述の継続をゲルベルトに依頼した。ゲルベルトは12年間固辞した後、1781年当初はドイツ教会史を構成する一分野の論文としてシュヴァルトヴァルトの歴史を著述することとした。しかし今日に至るまで全ドイツ教会史は刊行されていない。ドイツ教会史の一部分として「シュヴァルトヴァルトの歴史」を位置付けたにもかかわらず、ゲルベルトはこの著作を世俗史も含めたより広い視座から著述し、ドイツ世俗史に精神的根拠と歴史的事実への解釈を付与することによってドイツ世俗史を相対化しなければならない、という理念を持っていた。この理念は、アウグスティヌスの『神の国』に神学的基盤を持つスコラ神学に基づく歴史理念であった。だがこの理念は彼の独自性ではなく、当時のカトリック教会もプロテスタント教会も同様の歴史理念を持っていた。ただ、プロテスタントはその理念を同じアウグスティヌスの『神の国』の神学的系譜を持つものの、ルターの「二王国論」に負うところが大きかった。ドイツ全体の教会史を目指しながら、シュヴァルトヴァルトの歴史を執筆した彼の独自性は当時の当時ザンクト・ブラジエン修道院が置かれていた修道院存亡の政治的苦難の中に見出される。彼は痛みへの視点^(註15)に建つ神学者

であった、と同時に「失われゆくもの」への視点を持つ歴史家でもあった。

啓蒙思想の影響を受けたオーストリー・ハプスブルク家の政治理念は国家至上主義に反対するカトリック教会の改革であり、特に修道院の廃止と修道院財産の国有化政策という修道院にとっては非友好的なものであった。カトリック教会と修道院に対して多種多様な正当なまた不当な非難がなされた。女帝マリア・テレジアと1780年以来その長子である後継者ヨーゼフⅡ世との治世下で、オーストリア国内ですでに600の修道院が、国外の飛び地にある前オーストリアの22修道院が、閉鎖されていた。ザンクト・ブラジェン修道院が閉鎖された他の修道院と同じ運命に急襲されないという保証はどこにもなかった。この状況から明らかになるのは、ゲルベルトの執筆の動機が、最初は全ドイツの教会史の叙述ではあったものの、実は啓蒙主義と国家権力や教会権力によって見捨てられていく、シュヴァルツヴァルトの修道院と人々と自然とを護ることにあったと言える。見捨てられていくシュヴァルツヴァルトを持続する視点であり、失われゆくもの、失われたものへの視点である。この視点が彼の独自性の第二である。

ゲルベルトは『ヒストリア』の序言^(註16)において、シュヴァルツヴァルトにおける修道院の今日的存在意義と各修道院のシュヴァルツヴァルトへの歴史的貢献とを「シュヴァルツヴァルト全体への文明化」と総括し、『ヒストリア』に纏めた、としている。その意図は、各修道会がシュヴァルツヴァルトの人間と自然に働きかけてきた入植、開墾、キリスト教化、即ち文明化の歴史的過程を叙述することによって、皇帝に修道院の意義を急遽想起させ、国家権力の横暴を告発するものであった。キムゼーのフエルディナント・ツァイル宛1785年9月4日付書簡の中で、彼は以下のように記している。「しかし今や——最近の著述『ヒストリア』と『de Rudolpho Anticaesare』の主たる目的を内密に打ち明ける機会がきました。第一の目的は、修道会存続の歴史的功績、特に私がその輪郭を描いた事柄を、忘却した世間に熟知させることでした。第二義的

には教会権力と国家権力によるドイツ教会への弾圧を陳述することでした。」と、その意図を明快に述べている。ゲルベルトはハプスブルク家が近代化の過程で見捨てたザンクト・ブラジェン修道院の意義を再認識し、皇帝一族に失われたものへの積極的な関心を期待したのである。原著第二巻の最終章第13巻の結論の中で彼は修道院に対する様々な非難を取り上げ、その一つ一つに反論を加えていることも、修道院存続への願いであり、時の権力者への警告であり、時代のあり方を見失った世間への啓発であった。それを、皇帝への直訴に替えて、ラテン語を用い、古文書などの多数の資料を駆使し、スコラ神学によって解釈されてはいるが、彼独自の歴史理解に基づいて選択した客観的な資料を用いて、近代歴史学に基づくこの著作をもっておこなったのであった。啓蒙主義と国家至上主義に立つ皇帝への訴えと失われていくものへの強い愛着と失われていくことへの悲痛な響きが行間に感じられる。彼はザンクト・ブラジェン修道院の歴史的意義だけでなく、中部山岳森林地帯シュヴァルツヴァルトの奥深くまで、入植していったベネディクト派のヒルサウ、ザンクト・ゲオルグ、アルピスバッハ、ライヘンバッハ、リポルトサウ、フラウエンアルプ、フリーデンヴァイラー、ザンクト・ペーターの各修道院、シトー派のヘレンアルプ、リヒテンテントール、ギュッタールの各修道院と修道尼院、レンヒタールのプレモンタール派アレルハイリゲン修道院など、シュヴァルツヴァルトに入植した全ての修道院へ視野を広げている。

この著作の執筆動機が修道院存続にあるとすると、18世紀が述べられている原著第13章において、ザンクト・ブラジェン修道院の再建計画と再建中の銅板葺きドーム聖堂に関して言及されていず、むしろ修道院が当時まで保持してきた伝承について述べているのが、注目されるが、これも自己の存続ではなく、失われる者の存続である、という彼の姿勢を示しているものである。それは以下のことが示している。彼は原著第13章でザンクト・ブラジェン修道院にあるハプスブルク家の墓所

について述べて、修道院と皇帝家との霊的緊密さを想起させようと試みる。ゲルベルトが深い宗教心から、だがそれだけではなく修道院の威厳と格位を高めるという政治的意図からも、スイスのザンクト・ガレン修道院を初め、かつてのガリアやゲルマニアなどの様々な場所から収集した多数の聖遺物について述べている。その中で、ハプスブルク家の祖先であり、既に1771年に列聖され全オーストリア帝国の守護聖者である聖レオポルト聖遺体の小聖遺物と、ウィーンの聖シュテファン修道院からの聖人ピルミンと聖人フリードリーンの聖遺物をも列挙している。1783年9月21日銅板葺きドーム聖堂献堂式の日ゲルベルトが原著『シュヴァルツヴァルトの歴史』第一巻を刊行し、献堂式に参列した叙階聖職者、コンスタンツの大司教マクシミリアムに献呈したことは、偶然ではなかった。マクシミリアム大司教伯がこの原著『シュヴァルツヴァルトの歴史』を受け取ったことは、大司教伯が代表するドイツ教会が原著の副題を承認したことを意味する。その副題は「シュヴァルツヴァルトは聖ベネディクト派修道会の入植地域であり、ザンクト・ブラジェン修道院は存続しなければならない」と言う主張であった。

ゲルベルト第三の視点は、辺境への視点である。原著第一巻の古代の第一章から12世紀を論じた第7章にいたるまで、つまり第一巻全体を通して非常にしばしば、シュヴァルツヴァルトを「^(注18)辺境の地」、「非文明化の原生地」と表現している。第一巻の序言の中で、「シュヴァルツヴァルトは前人未踏の僻地であった」と表現し、イタリア人ルドヴィクス・ムラトリウスの古代修道士についての見解「修道士たちが、神と人への善行のために、荒れ果て、人里離れた野生動物の棲む原生地に滞在することは決してまれではなかった。彼らはその大地を次第に文明化する。自らの法外な努力によって、不気味で恐怖に満ちた暗黒の大自然に覆われた大地が文明化され、実り豊かな魅力ある農耕地へと、美しい保養地へと変えられた。私は古代の修道士たちが自然の中の孤独を好むことに気付いた。彼らはか

れらの徳を根底から揺るがす都会に滞在するのを好まないのである。^(注19)」を引用している。シュヴァルツヴァルトは古代ローマ帝国にとり辺境の地であった。ケルト人やゲルマン人にとってさえ、戦争敗北の際やむを得ず逃げ込む隠れ地、僻地であった。中世のフランク王国にとっても、辺境の地であり、中世の封建諸侯にとり、原生の荒れ野であった。ゲルベルトの時代もシュヴァルツヴァルトはハプスブルク帝国の首都ウィーンから、啓蒙と自由の中央集権国家フランスのパリから、絶対専制国家プロイセン王国のベルリンから、バイエルン王国の文化都市ミュンヘンから、依然辺境の位置にあった。ゲルベルトはこの辺境の地から歴史を解釈せざるをえない。その故に、この地点に立って、シュヴァルツヴァルトの歴史を、ひいてはドイツ全体の歴史を解釈する道を彼は選んでいる。

ゲルベルトの歴史理解のこれら三つの視点、つまり「痛み」への視点、失われたものへの、失われゆくものへの視点、辺境への視点は、シュヴァルツヴァルトの大地に反射して、痛みからの視点、失われゆくもの、失われたものからの視点、辺境からの視点へと反転し、シュヴァルツヴァルトの自然の四元体 (das ^(注20)Geviert) を露呈し、出現させる原著へと結実することになった。これらの視点はシュヴァルツヴァルトのカルフ出身の作家ヘルマン・ヘッセにも継承されている。ヘッセの作品は失われゆくシュヴァルツヴァルトの大地と自然と人々とを、生き生きと描き、シュヴァルツヴァルトの真実と再生している。同じシュヴァルツヴァルトのバーデン州メスキルへ出身で、マールブルクに一時の滞在はあるもの、その生涯をシュヴァルツヴァルトで過ごし、シュヴァルツヴァルトの森の近みで思索した哲学者マルティン・ハイデッガーは、シュヴァルツヴァルトに固執した。彼の哲学は痛みを持つシュヴァルツヴァルトの農夫たちとその大地の「近み」で営まれ、シュヴァルツヴァルトの失われつつある世界と隠された^(注21)大地を、存在へと露呈し、出現へとたらしめたものと、言えなくはないだろうか。ハイデッガーは『芸術の作品の起源』の中でゴッホ

の絵「履き古した農婦の靴」を用いて芸術作品を説明して、靴は「もの」だが、「風の吹きあれる耕地の畝を辿る姿、夜のとぼりを開き分ける朝、野道の寂寞、パンを得るための心労、出産を待つおののき、迫り来る死への戦慄」、つまり農婦の世界が露呈されているのがこの絵という芸術作品だと、述べている。^(註22)ゴッホの芸術作品「農婦の靴」が農婦の世界を露呈するように、芸術作品であるハイデッガーの哲学はシュヴァルトヴァルトの世界を露呈しているに違いない。従ってハイデッガーもゲルベルトの系譜に属していると言える。

ゲルベルトは辺境への視点に立っての歴史解釈を試みているが、それでは辺境という概念はいかなるものであったのか、ゲルベルトはユリアス・カエサルらの表現を用いて、辺境とは前人未踏の大地である、としている。しかし辺境が未だ人間の営為が加わっていない、つまり文明化されていない大地であるという定義であれば、シュヴァルトヴァルトはゲルベルトの時代には既に長い修道院の歴史を通じて文明化という自然への人間による営為が加えられてきている。その大地を辺境の地と呼ぶことはできない。さらに彼は未だ認識していなかったが、カエサルの時代、いやそれ以前の太古ケルト時代から、さらにそれ以前の前史時代からシュヴァルトヴァルトは移住による文明化がなされていたことが今日は証明されている。カエサルの前人未到という表現は、彼のローマ軍がこの森に初めて遭遇したという表現でしかない。500万年前に人類が出現して以来、辺境とされる地であれ、原生とされる地であれ、少なくとも人間の認識できる存在範囲での空間において、人間の有限の認識が宇宙にまで及ぶとすれば、宇宙も含めて、この地球上の大地の何処にも人間の文明化がなされていない場は存在しない。それでも尚ゲルベルトがシュヴァルトヴァルトを辺境地とすることは、辺境性を自然への人間の営為である文明化が未だ徹底化されていない地と認識していることに他ならない。都市と辺境地の差はどこにあるか、それは文明化の浸透の差でしかない。都市は文明化が

徹底して追求された空間であり、辺境は文明化が「いい加減」に追求された空間である。この辺境概念は辺境の近みに留まることによって可能となる思索である、と前出のハイデッガーは指摘している。ハイデッガーは前述の『芸術作品の根源』^(註23)において世界と大地という対概念を用い、世界とは存在が隠されていないで、露呈されている状況であると定義したことから、世界を非隠蔽性 (Unverborgenheit) であり、「明るみ」 (Lichtung)^(註24)である、とした。一方大地とはそこから開かれた場が出現する隠された根底であると定義したことから、大地を隠蔽性 (Verborgenheit) であるとした。存在するものが隠されていないさまである世界と存在するものが隠されているさまである大地とは根源的に抗争にあり、世界は大地が隠すのを許さず踏みつけ、大地は世界を「己れの中へ秘隠すること」へ、と呑み込もうとする、と存在の真理を現象学的に思索している。彼が「開かれた」または「明るみ」の意味に用いるドイツ語Lichtungは本来人間によって森が伐採された跡地に出現する空間または自然の力で露呈した空き地を意味した。またハイデッガーが大地をシュヴァルトヴァルトの森とみているのも確かである。世界と大地は海と岩とか森とかの個々の存在であるものに振り分けるのではなく、開かれたさまと隠されたさまであって、岩や森が隠されていないさまである限り、それらは世界に属し、それらが由来した場にかくされたままである限りでは、大地に属するとする。ハイデッガーにとり、世界と大地の根源的抗争が辺境性であることは言うまでもないであろう。根源的抗争とは現象学的表象であり、これをカント的認識論で表現すれば、自然と人間の調和であり、日本的に表現すれば自然と人間との「いい加減」な関係である。従って、辺境の地とは、世界と大地の根源的抗争のドラマが演じられている舞台である。存在の露呈へと、一方的に徹底すれば、存在するものは、存在の根底を喪失する、存在の秘隠へと一方的に固執すれば、存在のニヒリズムへと墮落する。辺境性とは世界と大地の根源的抗争がゲルマン人の好む「徹底化」されて、どちらか一方へと静止したさまではない

く、抗争が根源的に継続しているさまであり、どちらか一方へと徹底せず、「いい加減」に留まっているさまである。

ゲルヴェルトの三つの視点が、武力による世界制覇を目指すものと異なっている、その視点が人間の営為である限り、シュヴァルツヴァルトの自然と人間への働きかけとしての文明であることにはかわりがない。三つの視点による文明が徹底化されれば、自然と人間との関係、人間と人間との関係が絶対化されていくことになる。それはしばしば、武力による征服と同じ結果を生み出すことになることを、ゲルヴェルトは『シュヴァルツヴァルトの歴史』の中で示している。それに今また、啓蒙主義を徹底化した絶対王制国家によって、啓蒙主義に反する存在である修道院の理念が排除されようとしていることに対して、彼は自己の理念や教義が徹底されず、「いい加減」であった辺境の地から、発言をする立場にある。従って思想・理念の徹底化ではなく、この場合は啓蒙思想であるが、その徹底した具現化ではない、「いい加減さ」を求めているのである。「いい加減さ」という思想は辺境に滞在するゲルヴェルトである故に持つことが可能な辺境性であった、と言える。17世紀から18世紀にかけ、啓蒙主義に立脚する重商主義と近代合理主義は、中世以来、つまり修道院の入植が「いい加減」であった時代以来、ドイツ全体に三分の一は少なくとも残されていた原生の森が、シュヴァルツヴァルトでは大部分が残されていた原生の森を、秘境中の秘境であったシュヴァルツヴァルト最内奥に至る地まで、徹底的に伐採した。今日も、シュヴァルツヴァルトの森はオランダの森だったと言う人に出会う。シュヴァルツヴァルトで伐採されたオランダ材は、シュヴァルツヴァルトの溪谷河川からライン河を経てオランダへと「いかだ」で運搬されたのであった。今日のシュヴァルツヴァルトの森は人間の「手」が加わった人工の森である。しかし、人間は傲慢であってはならない。人間の「手」とは単に「もの」を露呈させたにすぎないのであり、「もの」はそれ自体で隠れてはいるが、「もの」自身も露呈するものであって、「もの」の「近み」に人間も共存するに過ぎ

ない。樹木は伐採されても、条件を整えれば、新しく生成するのであって、人間の関わりは「いい加減な」程度のものでしかないのである。

人間は有限である。しかも、しばしば制度や理念や国家は無限と受け取りがちであるが、これらも人間の営為であって、人間と同様に有限である。時間に制約され、歴史化された存在するものが徹底性を追求すると、徹底性は関係概念として絶対性を帯びることになる。有限なる存在が自己の絶対性を真なりと仮称するのが、徹底性である。理念、視点、制度、原理、宗教、価値、功利性、合理性、生活の利便さ、豊かさ、理性、科学、身体、生命、幸福、人間、理想、善、などへの徹底した追求は、様々な弊害を惹起している。グリム兄弟のドイツ的アイデンティティーを求める試みは、民話、伝説、神話収集の過程でも、ドイツ本来の民話でないものをドイツ民話とする偽装を施すことになり、ナチスによって、ドイツ民族の優位性へと徹底化され、絶対化され、ユダヤ民族を排除する理念となった。それはハイデッガーが自己の思想の徹底化を企図するため、その思想がドイツの大地を唱えるナチスの理念と重なることにより、ナチ党に入党したことが、ナチスの他民族を排除する理論へと絶対化されたことと同様の出来事である。ハイデッガーはその後の思想において、シュヴァルツヴァルトの辺境性の近みで思索することによって、その哲学を修正していった。特に今日のように「高度に」（「高度に」とはしばしば「徹底的に」の意味をもつ）文明化された、我々の時代においては、辺境の持つ「いい加減さ」が見直されていいのではないだろうか。人間は自然に対しても、人間に対しても、他の国にたいしても、「いい加減」にお付き合いをしないと、今日のように徹底して人間の営為にすぎないものを要求すると、存在の真理が無へと破壊されてしまい、そこには自己絶対化の残骸が立っているだけとなる恐れがある。

ゲルヴェルトは、私たちの人間関係が、文化というものを媒介にして、築かれていくことを、示している。ゲルヴェルトが、『ヒストリ

ア』という芸術作品を媒介にして、皇帝との関係を築こうとしているように、シュバルツヴァルトの諸修道院がシュヴァルツヴァルトの大地と自然という「もの」との関係を築き、その先に人間との関係を構築したと、彼の著作『ヒストリア』は表明している。つまり、シュヴァルツヴァルトの景観は、ベネディクト派修道院が5世紀から18世紀に至る13世紀を用いて、作り上げた芸術作品であるとゲルベルトはしている。この「もの」は人間と人間との媒介であって、同時に媒介でなく、存在するものである。芸術作品という「もの」は、存在が露呈したさまである。だが、存在するものは、露呈をはねのけ、隠れたがる。それを認めれば、露呈は不完全であり、徹底しない。露呈は途中で断念させられる。それは、露呈徹底の「いい加減さ」であり、その「いい加減さ」が含意に満ちた「遊び」を発生させる。「いい加減さを楽しむ」のである。この「遊び」や「いい加減さ」を人は「美」と感じたり、暖かいぬくもりとか、故郷とかと、感じる。この「もの」との「いい加減」な関係が、人間との「いい加減」な関係へと創造される。だが「もの」への徹底化は、排除の理念もしくは視点へと変質され、他の「もの」の排除へと至り、ある「者」への絶対的關係へと変容する。今、直線を引けといわれても、徹底的に、直線はひけない。地球上に直線を引いたとしても、地球上を一回転しただけにすぎない。それは既に曲線へと変容している。 π の答えを3とするとした文部省の小学生用教科書についての論議があった。それでは、余りにも「いい加減」ではないか、せめて「3,14」位まではという意見もあった。 π の答えを徹底的に出したらどうなるか、高々千桁の答えを出すまでに、スーパーコンピュータで現在でも600時間かかるという。人間には限界があるのである。「いい加減」でしかないのである。それなら最初から、「いい加減」で「3」でというわけにはいかない。「世界」と「大地」は根源的抗争にあり、痛みをもつ「もの」が存在する。失われた「もの」、失われつつある「もの」が存在する、辺境が存在する。私たちは痛みの近みに留まって、痛みを共感し、痛みを和らげな

けなければならない。失われたもの、失われつつあるものの近みに留まって、失われたものを、失われつつあるものを、存在として露呈し、継続し、再生を目指す視点にとどまらなければならない。辺境の近みに留まって、辺境を創造しなければならない。従って視点の徹底化ではなく、視点の近みに留まることを「いい加減」に断念しては、また新たに再び「留まること」の反復による絶えざる継続が、これらの視点の在りようであり、ゲルベルトの原著『ヒストリア』に示された人間と自然について示された思想である。

さてこれまで、ゲルベルトの思想について述べてきたが、次にゲルベルトの『ヒストリア』を参考にしてシュヴァルツヴァルトの森と人間との関わりを古代から中世の14世紀まで概観して、この論文の思索の場となる大地への理解を深めることにより、シュヴァルツヴァルト景観形成の過程を明らかにしたい。

4 シュヴァルツヴァルトの森と人々

シュヴァルツヴァルトの地理学上の成立時期は、中生代末期の第三紀、今から6千5百万年前に始まったアルプス造山運動にともない、その北側のヴァリスカン地帯が連動し、様々な標高差に隆起ないし陥落し、現在の中位山地帯の骨格を構成した時である。ヴァリスカン山系はフランス中央高原から北東方向へ向き、ドイツ中央部を経て、南東方向へ転換する弧状大褶曲山系である。その骨格形成過程でこの地帯は断層運動により、多くの地塊に分断され、地壘状山地や高原、オーバーライン地溝帯、ヘッセンやシュワベン地方の低地を生成した。これらの中位山地帯の高原や低地を囲む標高中位の山脈は、オーバーライン地溝帯、ライン片岩山地地溝帯、とズデーテン式地溝帯に別れる。シュヴァルツヴァルトはオーバーライン地溝帯に位置する。オーバーライン地溝帯は東側にあるシュヴァルツヴァルトとその北側に続くオーデンヴァルトと、西側にあるフランス・ヴォーグーゼン山脈（別名ヴォージュ）とプファルツァヴァルト（プファルツの森）とによって構成されている。中位山地帯は名称どおり千メートル

を超える高山はすくなく、シュヴァルツヴァルトの最高峰フェルトベルクが1493mである。

シュヴァルツヴァルト地方は標高差800mで、南北166km、東西幅、北部で約20km、南部で60kmに及ぶ。その北端付近のプフォルツハイムはネッカー川諸支流の合流点で、古くから「黄金の都市」として知られた。南北に長いシュヴァルツヴァルトは多雨をもたらす西風により豊富な水源地帯となり、ライン支流ヴィーゼ、キンツィヒ、ムルクの各川、ドナウ上流のブレーク川やブリガハ川などの多くの川や湖を潤おしている。

シュヴァルツヴァルト南部地方の主要岩石は片麻岩(花崗岩＝御影石)であり、北部地方は砂岩である。南部地方と北部地方の境界線はライン川の支流キンツィヒ川である。シュヴァルツヴァルトはキンツィヒ峡谷を流れるラインの支流キンツィヒ川によって南北に分れる。キンツィヒ峡谷より北の北部シュヴァルツヴァルトは今日三分の二をモミヤトウヒの針葉樹に覆われている。大地の上部地層が中生代の砂岩からなり、砂岩の風化土は地味が悪く農業に適しないからである。しかし砂岩の色調はシックな紅色や黄色などの多様な雑色砂岩と呼ばれ石材として広く愛用されている。

シュヴァルツヴァルトの中部と南部は、古生代アルプスの名残である花崗岩や片麻岩などで山容が形成され、それらの風化土は比較的肥沃である。山容は隆起準平原の特色を持つ円やかな山頂部、中腹に広がる緩やかな牧草地、若く深い谷の急斜面は森林に覆われている。酪農を営む農家が浅い凹地に点在し、その上限は標高1200m付近にまで及ぶ。^(註25)

シュヴァルツヴァルトという名称

この森についての言及は古くは古代ギリシャ時代と古代ローマ時代に見られる。ギリシャ人アリストテレスはこの森周辺を移住していたケルト人の一部族マルコマンニ族に従って「アルキニアの森」と呼んでいるが、この名称は実はドイツの森の総称であった。このギリシャ的名称をゲルベルトはこう述べている。「周知のアリストテレス的表現はア

ルキニアの森であり、ゲルマニア地方全体に分布した森を指していた。森というギリシア語ホーロス(horos)は辺境の意味だったり、オルキニアの山だったり、オルキニアの地、とも呼ばれた。アルキニアともオルキニアともヘルキニアとも呼ばれた。」と述べている。^(註26)

後にローマ人ジュリアス・カエサル、タキトゥス、プリニウスなどは、この森を「ヘルキニアの森」と命名している。これはスイス寄りにシュヴァルツヴァルトの周辺地域に定住し、後にスイスへ移住し、スイスの原住民とされたケルト人ヘルヴェチアン族に起因するのではと推測される。シュヴァルツヴァルトという名称が最初に登場するのはスイスのザンクト・ガレン修道院の868年の古文書である。ゲルマン部族法の中の記録であることから、ゲルマン族が元来この森をそう呼んでいた可能性のあることを示している。ケルト人は本来書き言葉を使用しなかったため、名称の記録はなく、ゲルマン人も初期の段階では小枝を使用した書き言葉ルーン文字をもっていたが、それを記録文字として用いることは稀であり、主に占いに使用された文字である。従って、ギリシャやローマのように、ケルト時代やゲルマン時代の初期においては、話し言葉による名称が書き言葉として保存されていなかった。その後、シュヴァルツヴァルトにあるザンクト・ブラジェン修道院やザンクト・ペーター修道院の古文書にもシュヴァルツヴァルトの名称が散見されるようになった。それもこのシュヴァルツヴァルト地方だけでなく、スイスや、ドイツの他の地方にも同様な名称の森があったことが記されている。そうすると、ケルトやゲルマンでは「シュヴァルツヴァルト(黒い森)」という名称が森を意味する名称であったことになり、その後徐々に他の地方の森を指すシュヴァルツヴァルトが消えていき、現在のシュヴァルツヴァルトの地名だけが残ったと、考えられる。ドイツのベツシュは、その論文「地名シュバルツヴァルト」(1981年)の中で、この名称はゲルマン時代を超えて遥かケルト時代にまで遡ると指摘している。^(註27)

この論文で取り上げる『ヒストリア』の著

者ゲルベルトがシュヴァルツヴァルトをラテン語「ニグラ シルヴァ（黒い森）」で表現しているのは、専門書は未だラテン語で執筆する当時の習慣に従ったのであって、「シュヴァルツヴァルト」が原語で「ニグラ シルヴァ」はラテン語訳であると考えられる。著者ゲルベルトは上記の言語学的分析によるベツシュの見解を知らないので、古代のシュヴァルツヴァルトの名称を、ギリシャ語の名前、ローマ語の名前で表現している。その名前に基づいた、ローマの諸著述家の諸記述と諸古文書とその地から出土した諸古貨幣、諸石碑、諸遺跡、諸城砦跡を史料として彼の歴史を構築している。またゲルベルトの著書が再発見されたのが1980年代であるのでB., ベツシュもゲルベルトの著作を知らない。しかしシュヴァルツヴァルトの名称を固定したのは、18世紀中葉のこのマルティン・ゲルベルトによる『ヒストリア』であった、とされている。

シュヴァルツヴァルトの森と人間の関わり

地理学上の第三紀、今から6万5千年前、シュヴァルツヴァルトを含む中部ヨーロッパには、針葉樹、広葉樹とヤシ科植物の樹高100m以上、樹令千年の褐炭樹林が広がっていた。5百万年前には銀杏樹種が死滅し、百八十万年前までは、常緑多雨原生林と月桂樹林に変わったが、百八十万年前から氷河期に入り、中部ヨーロッパを氷河が覆い、森林は消滅した。氷河時代後期にスカンディナヴィア地方から伸びていた、巨大な氷塊の痕跡が今でもシュヴァルツヴァルトの最高峰フェルトベルクに見られる。森林が再び発達するのは、約紀元前1万年である。地中海沿岸地域の南ヨーロッパから、南アルプスを初めとして、アルプス西側を含む南部中位山地帯、ヴォージュ山脈、シュヴァルツヴァルト、ボヘミア盆地を含む山脈へと、カバノキ、マツ属とシラカバ属の混交樹林が伝播していった。クロマニヨン人を先祖とする人びと、東洋から入り込んだ人びと、次第に両者が混交した人びとが、中部ヨーロッパの森に分散して存在し、森を転々と、20年から50年をサイクルにして移住した。森の空き地へ移住したり、誰か以前に住んでいた跡地または樹木を伐採

し易い谷間の地へと移住し、周囲の森から調達した樹木で、長いものであれば40mにも及ぶ掘立式小屋を立て、3～4家族が共に一つ屋根の一つ部屋で生活し、周囲の森を利用し尽くす前に、次の移住跡地とか空き地へと移動した。転々と移住することで、森の再生力に期待できた。紀元前8千年から、ハンノキ、オーク、ハシバミなどの広葉樹種が復帰してきた。紀元前5千5百年頃から、高地山岳地帯ではニレ、シナノキ、トネリコ、トウヒが多く、中部ヨーロッパ全体ではオーク混交樹林時代がはじまった。このように、気候温度の変化に左右される、植物、樹木や動物は、地中海沿岸地方の南方から、何万年、何千年、何百年という長いサイクルを要して、少しずつ亜熱帯地方、温帯地方、寒冷地方の中部ヨーロッパ地方へ、と拡張していった

中部ヨーロッパの森は、紀元前2千5百年からブナ樹林へと植生が変化し始め、シュヴァルツヴァルトにモミ樹林が広がった。紀元前3千年～2千年頃からは、最初の定住化がおこなわれ、定住地の人口増加に対処するため、焼畑開墾による森林利用がおこなわれた。太古以来長い間行なわれてきた森を転々と移住する生活スタイルは、森に定住するようになって、かなり後まで残っていて、完全に消滅したのは、中性末期だと指摘する学者もいる。ゲルマン民族の大移動も、一種の従来の移住スタイルの大掛かりなものに過ぎない、とも考えられる。彼らは中部ヨーロッパに広がる森に道を作り、その幾つかの道を通り、自由に他の町や他の諸部族や、さらには地中海地方とも交流していた。移住生活スタイルは、移住跡地や森の伐採地や人間による森を用いた建造物も自然の再生力により、中部ヨーロッパの森の総面積を、減少させる要因にはならなかった。移住期の場合、親、兄弟、孫の夫々の家族、つまり大きくても10人～40人程度の一家族の移動だったが、定住後はこのような家族が数10～100で構成される村に分散して広がって暮らした。ちなみに、ゲルマンの家屋は基本的に掘立て一軒一部屋方式で近世に至るまで移住時代のスタイルが継承されていた。紀元前千年ころに出現

し、紀元前44年ローマ帝国に征服された、ケルト人は銅器時代と鉄器時代にかけて、高い優れた文化を持ち、多量の価値ある文化遺産を残している。彼等の定住地は部族長、ドルイド僧、戦闘集団、即ち平時の市民層があり、戦う集団によって構成された議会、工業、商業、牧畜農業とすでに分業化された統一した一つの国家のような町を形成していた。このように拡大された定住地は、森の利用面積を格段に広げた。その周囲の森林を焼き畑によって、開墾したり、青銅製や鉄製の武器、日用品、馬具、見事な装飾品、精巧で優れた宗教用奉納品などが多数作られていた。彼らはチーズやソーセージやハムを製造していた。つまり、牛、馬、豚飼育のための森が必要であった。ヨーロッパの塩は岩塩であり、製塩も樹木を必要とした。このように、文化の創造のため、多量の森の樹木が伐採された。森の樹木は住居用だけでなく、必要な莫大なエネルギー源として用いられた。文化が高度であればあるほど、それを支えるエネルギー源は膨大となる。人類は膨れ上がったエネルギー要求に答えねばならない。

征服者ローマ人は最初アルプス北部に入植したが、結局そこだけで満足せず、植民地をライン川流域とドナウ川流域地方へと広げ、ブナ樹林が主流である広葉樹林の森々へ、多数軍隊を派遣し、宿営地を築き、ローマ的都市を建設した、例えばマインツにはローマ軍を含めて8万のローマ人がいた。規模はマインツほどには大きくはないが、ライン河畔のシュパイアー（シュヴァルツヴァルトに近い）にも。植民地内ローマ軍都市の規模はケルト人やゲルマン人の町や村のそれに比較の仕様が無いほど巨大であった。文化も高度であり、生活のレヴェルが全く違った。例えば、前者は毎日風呂に入り、髭をそり、香料をつけ、布製衣服をまとったのに対して、後者は、風呂の習慣なく、髭もそらず、毛皮をまっとうしていた。広大な浴場には膨大な木材が消費された。高度に文明化されたローマ都市とローマ人の生活を支えるには、ケルト文化やゲルマン文化を支えるより遥かに凌駕する量のエネルギーを必要とした。彼等は、アルプス山脈、ヴォージュ山脈とシュヴァルツヴァルト

とその周辺地域のトウヒを伐採し、伐採した木材をライン川とモーゼル川を通して運搬した。けれどもその東部にある乾燥した冬季寒冷地域には入植できなかつた^(註28)。彼等は寒冷地帯に適応できなかったのがであった。その結果、ローマ帝国時代とゲルマン民族の移動時代つまり紀元前四百年から紀元後百年頃までにローマ帝国の植民地であった中部ヨーロッパの森林の四分の一が既に開墾されていた。

この時代に、シュヴァルツヴァルト周辺にはケルト人のマルコマンニ族が定住していたが、後に、この部族はボヘミア地方へ移住した。シュヴァルツヴァルトの南に同じケルト人のヘルヴェチアン族がラウラキアー族に隣接して定住していたが、この部族も南のスイスへ移動し、スイスの原住民族となった。その後ヘルヴェチアン族と重なるようにゲルマン人であるアレマン族がラインを南下してきて、シュヴァルツヴァルト周辺地域に定住した。このアレマン族はその後移住せず、今日ではシュヴァルツヴァルトの原住民族とされている。それは、この部族がシュヴァルツヴァルトの内部地域にまで定住した最初の人たちであったからであろう。森を軍事的用材を含めて種々の用材調達の場合とする森林観によるローマ軍の略奪的伐採は、シュヴァルツヴァルトの原生林を荒廃させたけれども、未だかなりの部分に原生林が残った。その後次第にローマ軍が撤退した頃、フン族のアッテッラが中部ヨーロッパに侵攻し、シュヴァルツヴァルトの森を荒廃させた。ヒエロニムス（Hieronimus）のアゲルキアス（Ageruchias）宛書簡を引用して、ゲルベルトは、「5世紀後半フン族はパンノニア属州からドナウ河流域にだけでなく、ライン河に至るまで侵攻し、ライン河渡河の際フン族長アッティラは我々の森林地帯周辺地域を全面的に荒廃させた。アッティラは我々のシュヴァルツヴァルトからライン河に要する多量の木材を伐採し、更に、ラウラキアー要塞、ヴィンディシュ要塞、シュトラスブルク要塞の、用材とした。シドニウス・アポリナリス（Sidonius Apollinaris）はその詩の中で「目にもとまらない一斧で伐採され、シュヴァルツヴァルトは河へ倒れ伏した ライン河は川船で満ちた」と歌った」

と述べている。^(注29)

紀元後500年～1400年、ゲルマン民族が勢力を増大し、その結果ローマ帝国がシュヴァルツヴァルトから撤退すると、ローマ帝国を経由してではあるが、武力による制圧と略奪をその使命とする軍隊とは全く異なった使命をもつ修道士たちが、辺境の地シュヴァルツヴァルトへ進んで入植した。その使命とは、その地域の痛みを持つ者と自然への和らぎの伝達であった。シュヴァルツヴァルト地方への入植にとって重要な最初の拠点となった主教座区は510年頃にヴォージュ山系とライン川との間に広がるシュトラスブルクに設定された。ここはライン河を隔てたシュヴァルツヴァルト西側に隣接していた。次は、その世紀末シュヴァルツヴァルトの南東部の端に位置するボーデン湖畔のコンスタンツに司教座が設定された。これは、シュヴァルツヴァルト地方への入植を支える南の拠点であった。この司教座は1578年から南部シュヴァルツヴァルトにあるザンクト・ペーターへ、更に1821年からフライブルクに移った。シュヴァルツヴァルトへ入植した最初の修道士は、アイルランド出身フリートリン (Fridolin) であった。522年に彼はライン中州のゼッキンゲン^(注30) (Zäckingen) に最初の伝道拠点を設立した。次の修道士は、7世紀の同じアイルランド出身のコルumban (Kolumbarn) であった。彼はボーデン湖畔ブレゲンツ (Bregennz) に定住した。603年オフエンブルク (Offenburg) の、今日のオルテナウ (Ortenau) の、近郊にシュッテルン修道院 (Schuttern) が早くも建設された。645年ナゴルト (Nagold) 近郊にヒルサウ修道院 (Hirsau) がアイルランド・スコットランド出身のウイルヘルム (Wilhelm) によって創立された。この修道院は非常に重要な役割を果たした。640年頃アイルランド・スコットランド出身のトルツベルト (Trudpert) によってミュスタール溪谷 (Müstertal) に聖トルツベルト修道院が基礎付けられた。682年にはフルトヴァンゲン (Furutwannen) 近郊に聖ゲオルゲン修道院 (St. Georgen) が、724年頃ボーデン湖畔にライヘナウ修道院 (Reichenau) が、762年頃エッテンハイムミュンスター修道院がと、次々にシュヴァルツヴァ

ルト地域の峡谷や山間の厳しい森の中に創設された。

800年のカール大帝の即位に至るまで、ゲルマンにおいて基本的に森の所有者は存在しなかった。カールが神聖ローマ帝国皇帝に即位して以来、神聖ローマ帝国領域の大地は皇帝に所属するものとなった。領域外でさえ、そこが開墾されれば、その大地は皇帝の所有となった。中世の大開墾時代の第一期は500年から800年である。これは、修道士たちがシュヴァルツヴァルトへ盛んに入植した時代であった。森の所有者は存在せず、この森の開墾地は修道士の所有になるのではなく、修道院の所有となった。^(注31) シュヴァルツヴァルトの森は、修道士が独力でどのように尽力しても歯が立つような大地ではなかった。ケルト・ゲルマンも数家族共同で少々開墾できるほど森は厳しかった。修道院は少なくとも頑強な修道士5人以上の修道士の共同体であった。

シュヴァルツヴァルトの歴史と景観形成に重要な働きをしたのは、これらの諸修道院であった。上記のように、これらの修道院の設立者はことごとくローマから派遣された者ではあるが、出身はアイルランド・スコットランドである。当時はアイル・スコットとしてアイルランドとスコットランドは区別されていなかった。彼等はローマ帝国に征服され、ヨーロッパの辺境であるアイルランド・スコットランドへ数世紀前に逃れたケルト人であり、自然に愛着を持つ人々であり、故郷の自然や人々を残して、自分たちの故郷に似た辺境の地に一身を捧げ、また共にシュヴァルツヴァルトの自然と人々のために働く仲間を故郷の地から呼び集め、共に大西洋をわたり、ガリアを経て、この辺境の地へきたのであった。従って同じ入植・開墾であってもローマ時代のそれと修道院のそれとは全く内容が異なっていた。その相違と内容を、マルティン・ゲルベルトは彼の『シュヴァルツヴァルトの歴史』において描いている。ローマの森開墾が武力と征服の歴史であるならば、諸修道院の歴史はシュヴァルツヴァルトの痛み

を持つ自然と人間への共感と共存の歴史であることを彼は示そうとしていることはすでに述べた。

カール大帝の皇帝即位（800年）後ゲルマンの地は皇帝の所有となった。所有者のいない森を開墾すればそこは皇帝の所有であった。かくて王家御猟林が設定されたが、時代と共に皇帝所有の森が次第に封建諸侯へと譲渡されるようになった。皇帝やこれらの諸侯からの寄進により、修道院は森や土地を拡大していった。

855年にゲンゲンバッハにゲンゲンバッハ修道院が、868年聖ウルリッヒ修道院が建造された。916年頃フン族が再び、エルザスのロトリンゲン（Rothringen）からライン河畔まで侵入し、917年にはスイスのバーゼルが陥落した。フン族は遠征路上のシュヴァルツヴァルトの森も再び荒廃させた。948年、フン族の脅威を感じたスイスのザンクト・ガレン修道院はシュヴァルツヴァルトの南部の奥深いザンク・ブラジェンへ修道士たちを派遣し、1092年南部シュヴァルツヴァルトの修道院の中で最重要な意義をもつザンクト・ブラジェン修道院が創設された。聖キリアク（Cyriak）はズルツブルク修道院（Sulzburg）を1004年に創立した。ライン河畔のドイツとスイスの国境の町シャッフハウゼン（Schaffhausenn）にある聖サルヴァートル修道院（Salvator）が1050年に設立された。この修道院の古文書に今日有名な保養地となったシュヴァルツヴァルト最古の湖ティティゼー（Titisee）という名称が記されていた。1070年ライヘンバッハ修道院（Reichenbach）が、1089年ツヴィファルテン修道院（Zwiefalten）が、1093年ザンクト・ペーター修道院（St. Peter）が、1095年アルピルスバッハ修道院（Alpirsbach）が、この時期のシュヴァルツヴァルトの各地に創立された。この時期は中世の大開墾時代の第二期（800年－1100年）であるが、シュヴァルツヴァルトでは1000年頃から修道院によってトウヒとマツが拡張されていった。この時期は最初の計画的組織的開墾が始まった時期であった。^(註31)

中世期の大開墾時代の第三期（1100－1300）

に新たに参加したのは、1115年に設立されたアウグスティヌス派修道院ザンクト・メルゲン（St.Märugen）、1134年のシトー派修道院サーレム（Salem）。1139年の当初ベネディクト派後にシトー派へと改革したフリーデンヴァイラー修道院（Friedenweiler）、1158年シトー派修道院テネンバッハ（Tennenbach）が、1191年プレモントレ会修道院アレルハイリゲン（Allerheiligen）が設立された。13世紀になると、森を開墾したのは修道院だけでなく、領邦諸侯も競って開墾した。領邦貴族のレーン森林が増大していった。^(註32) 中世期の大開墾時代 第一期（50－800）、第二期（800－1100）第三期（1100－1300）にシュヴァルツヴァルトは森と人間が修道院を通じて文明化され、シュヴァルツヴァルト固有の景観が成立していった。

シュヴァルツヴァルトにはこの時点で、未だ大部分の原生林が残っていた。

1400年以降については他日に譲ることにする。

使用したゲルベルトの著書

原 著

Gerbert, Martin . *Historia nigrae Silvae ordinis S.Benedicti coloniae*. Typis San-Blasianis, Tomus I, 1783, Tomus II, 1788

Gerbert, Martin.. *Historia nigrae Silvae ordinis S. Benedicti coloniae—Codex Diplomaticus*. Typis San-Blasianis, Tomus III, 1788

ドイツ語版

Gerbert, Martin. *Geschichte des Schwarzwaldes*. Siedlungsgebiet des Ordens des heiligen Benedikt. übers. von Adalbert Weh, Freiburg im Breisgau : Rombach, Bd., I 1993, Bd., II, 1996

引用文献

注 1 Gerbert, Martin. *Iter alemannicum, accedit italicum et gallicum*. *Sequentur Glossaria Meotisca*, Typis. San-Blasianis 1765

注 2 Hilger, Franz, Martin Gerbert. *Fürst und Abt von St. Blasien*, Freiburg i. Br. 1993

ゲルベルト伝記は、この優れた著作を参考にした。特に59頁に引用文献が記載されている。

Weh, Adalbert. *Geschichte des Schwarzwaldes II* S.15 Rombach,1996

これは訳者ヴェーの原著者ゲルベルトに関する解説であるが、その大半の史料はHilgerの上記著作に依存している。

更に、ゲルベルトの政治的活動に関しては以下のフライブルク大学で行なわれた講演を参照。

Kessler, Stephan, SJ. : *Zwischen Frömmigkeit und Politik. Zur Reliquienverehrung von Fürstabt Martin Gerbert*, Vortrag von 2.9. Okt.1993 bei der Gerberttagung der Kath. Akademie i. Br.

注 3 *Das tausendjährige St. Blasien. 200 jähriges Domjubilaeums*. Bd. I : Katalog der unter Vorsitz von Dr. Johannes Gut besorgten Ausstellung des Jahres 1983. Bd.II : Aufsätze, unter anderem von Prof. Dr. Wolfgang Müeller, Prof. Dr. Hugo Otto, Dekan Heinrich Heidegger

を参照。

注 4 Gerbert, Martin, *Principia theologiae*. I---VIII, Typis Monaset. S. Blasii 1757—1759

注 5 Gerbert, Martin, *De cantu et musica sacra*. Typis San-Blasianis, Tomus I, II, 1774

注 6 Gerbert, Martin. *scriptores ecclesiastici de musica sacra possimum*. Typis San-Blasians, I—III, 1784

注 7 Gerbert, Martin. *Codex epistolaris Rudolphi I.* Typis San-Blasianis, 1772

注 8 Gerbert, Martin. *Monumenta veteris liturgiae lemannicae*. Tomus I.1777, II. 1779) , Typis San-Blasinis

注 9 Weh, Adalbert. *Vorwort zur Übersetzung und Ausstattung des 2. Bdes*. In : *Geschihe des Schwarzwaldes*, Bd.II S.12

注10 Gerbert, Martin. *Historia I. 0 Geschichte II, S.11* 原著第一巻 0 頁 ドイツ語版第一巻 11頁

注11 Maurina : *Gallia christiana in provincias ecclesiasticas distributa*, 16 Bde., Paris 1739-1877 Bd.V

注12 Bruchsius, Caspa. *Chronologia monasteriorum Germaniae praecipuorum ac maxime : illustrium*. Sulzbach 1582

注13 Bucelinus, Gabriel. *Benedictus redivivus*. Feldkirch 1679

ders., *Germania-sacra et profana*, Augsburg, 1655

注14 Hansiz, Marcus, *Germania sacra*. 3 Bde, 1727-1755

注15 「痛み」については、拙著『痛みの人間学』青山社 2002年 168-172頁を参照

注16 Gerbert, Martin. *historia nigrae silvae I. 0*

注 17 Müller, Wolfgang. *Briefe und Akten, des Fürstabtes Martin II . Gerbert*. S.200, nach verarbeiten von Georug Pfeilschriter und Arthur Allgeier baarbeitet, Bde 2, Karlsruhe, 1957 und 1962

注18 前掲書 *Historia I. 0 Geschichte. I. S.. 11* 原著0頁 ドイツ語訳版 S.11

注19 Muratorius, Ludovicus. *Rerum Italicaru scriptores*., Bd.XXV Mailand, 1723—1738 p.400

注20 Heidegger, Martin. *Bauen Wohnen Denken* (1951) *Das Ding* (1951). In : *Martin Heidegger Gesamtausgabe Vorträge und Aufsätze Bd.7*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main 2000, S.147-187

注21 「自然の近み」については、拙論「ハイデッガーの自然哲学について」新潟青陵大学紀要第2号.2002年103-104頁を参照されたい。

- 注22 Hedegger, Martin. Der Ursprung des Kunstwerkes (1935/36), In : Martin Hedegger Gesamtausgabe Holwege Bd. 5, 1977 Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann S.19
- 注23 前掲書Heidegger、Martin. Der Ursprung des Kunstwerkes,S.35-36
- 注24 前掲書 Heidegger Martin, Der Ursprung des Kunstwerkes S.1
- 注25 この項は、加藤雅彦他編 現代のドイツ大修館書店1998年39-42頁を参考にした。
- 注26 前掲書 Historia 1, Geschichte S26
- 注27 Boesch, B., Zu dem Ortnamenn Der Schwarzwald. In "Schwarzwald" Buehl/Baden, 1981 シュヴァルツヴァルトの地名に関して、北村昌美編著 森林と文化—シュヴァルツヴァルトの四季— 東洋経済新聞社 1971を参照
拙論文 古代ゲルマン語 “Wald”への宗教史的視点 I, pp、75-76、新潟青陵女子短期大学研究報告 第27号1997を参照
- 注28 Hansjoerg Küster,; Geschichte des Waldes, S.107, München, .H.Beck, 1998
- 注29 前掲書 Historia 14, Geschichte S.47
- 注30 前掲書 Historia 25, Geschichte S.65-66.
- 注31 拙論文 古代ゲルマン語 “Wald” への宗教史的視点II 中世 新潟青陵女子短期大学 研究報告 第28号 1998 75-76頁
- 注32 拙論文 同上 76-78頁